目

次

I 生きる……1
食べること 2／踊る 5／祈る 8／伝える 11／運ぶ 14／のぞく 17／飼う 20／とりもどす 23／生まれる 26／飾る 29／飲む 32／生きる 35／乗る 38／笑う 41／嗅ぐ 44／賭ける 47

II 働く……51
働く 52／ねむる 55／育てる 58／よろこぶ 61／おんぶ 64／語らう 67／うたう 70／たたかう 73／伸びる 76／集まる 79／泳ぐ 82／ふれる 85／浴びる 88／ひろう 91／奏でる 94／習う 97

III 愛する……101
焼く 102／走る 105／誓う 108／あやす 111／泣く 114／歩

く 117／学ぶ 120／見つめる 123／恋する 126／別れる 129
／手をつなぐ 132／つくる 135／刈りとる 138／商う 141／
「ケンカ」する 144／ともに生きる 147／愛する 150
あとがき……153

誓　う

「指きりげんまん、ウソついたら……」と、子どものころ、自分と相手の小指をからませて、友だち同士の約束をした。これが「誓う」ということなのだと知るのは、成長してからなのが普通だろう。

人間は人間同士で誓い、あるいは神とも誓う。誓いがなければ、人類の社会そのものが成立しない。男女の誓いとなれば、なんといっても結婚式がある。この儀式は、それぞれの民族の歴史と文化で実にさまざまなので、世界を旅していても、そのつど撮影したくなる。

イエメンの丘で、花冠をつけてジャンビーヤという短剣をかざした花婿たちの踊りに出会った。集団結婚式なのだが、花嫁の姿はどこにも見えない。踊るのも観客もみな男性ばかりである。踊りが終わって、イスラム寺院で結婚の誓いが行われるというので行ってみると、そこにも花嫁はいない。いないどころか、花婿は花嫁の顔すら見たことがないという。二人の誓いはどこで？と心配になってしまうが、儀式全体が実は誓いの準備なのだった。

ガムラン音楽の流れる中、新郎新婦が左右の入り口から入ってきた。インドネシアのジョクジ

ロウソクに照らされた厳粛な儀式

ャカルタでの結婚式だが、新婦のさし出したボウルに入れた生卵を、新郎が素足で踏んでつぶす。次に二人で正面の雛壇にのぼり、新婦はナシゴレン（インドネシア式焼飯）をつきそいの女性から受けとり、手でつまみ新郎の口に運び、新郎がそれを食べて儀式は終わる。結婚の誓いとは、ともに子孫繁栄のために尽くすことであるのが分かる。

これらは宗教に結びついた誓いの方法だが、宗教がなければどうなるか。旧ソ連時代のモスクワでは、晴れ着をまとったカップルがレーニン廟、スターリン廟におもむいて誓いを新たにしていた。

チャウシェスク政権時代のルーマニアは、外国人がカメラをさげているだけでも逮捕される厳しさだったが、地方のモルダヴィアに行くとホテルの向かいに教会があった。日曜日のミサが終わってすぐに、けたたましいほど鐘が鳴り響いた。ギリシャ正教にのっとっての結婚式なのだった。

ガチガチに緊張した新郎新婦が、ロウソクを持つ親族一同の中央で、神父たちを前に誓いのことばを述べる。そして教会を出るカップルは、最高に幸せそうな顔をしていた。

あやす

「いないいない――バアー」

おじいちゃん、おばあちゃんにとって、初孫ほどうれしいものはない。両親が子をあやすのは当然としても、あやすのを心から喜んでいるのは、祖父や祖母の顔によく表れる。

ブータンでのこと。孫を背負って子守りする老人をどこの村々でも見かけた。大家族制度が保たれているので、そうした光景が多いと教えられたが、考えてみると、かつての日本ではどこでもそうであった。

上の子が下の子を、祖父母が孫を、親が子を、あるいは近所の年長者が幼児を、いろんなかたちであやすのは、かつての日本ではごくありきたりだった。だから、あやすのは、ことにとりたてて説明されなくても分かっていて、それが、あえて、あやすとは何か？　などと腕組みして考えざるをえないのは、どこかおかしい。

でも、こんな光景も見た。ポーランドの幼稚園でのこと、ままごと遊びで、大きな人形を相手に一生懸命にミルクをのませあやす少女がいた。彼女が体験した家族の愛のキズナを見る思いが

孫を抱き，こぼれる笑顔

した。

ともあれ、カナダのモントリオールで、ミッシェル・ガーギィさん宅を訪ねた。娘の誕生五〇日目の洗礼式を行うために、親戚の人たちがたくさん集まってきた。中でもたのしみにしていたのは、嫁さんの両親である。教会での儀式をきちんとすますと、生後間もない赤ん坊は、疲れてしまったのか、家に戻ってくるとウトウトしはじめた。だが祖父の方は、あやしたくて仕方がない。孫は申し訳程度に目を開く、そうすると大感激のおじいちゃんは、頬をつついて、またまた起こしてあやそうとする。

あやす方法というのは、これまた民族によってさまざまなようだが、おんぶにだっこは世界共通だろう。方法とは別に、あやす側の人間の心や表情には、地球どこでも変わりはない。アフリカの内乱をのがれた難民キャンプ、豊かさを絵にしたようなヨーロッパの家庭、自然の中で生きるアンデスの山村、どこに行っても、あやしている大人の顔は、あやされる子どもと同じく、純朴で、けがれのない愛情にあふれている。

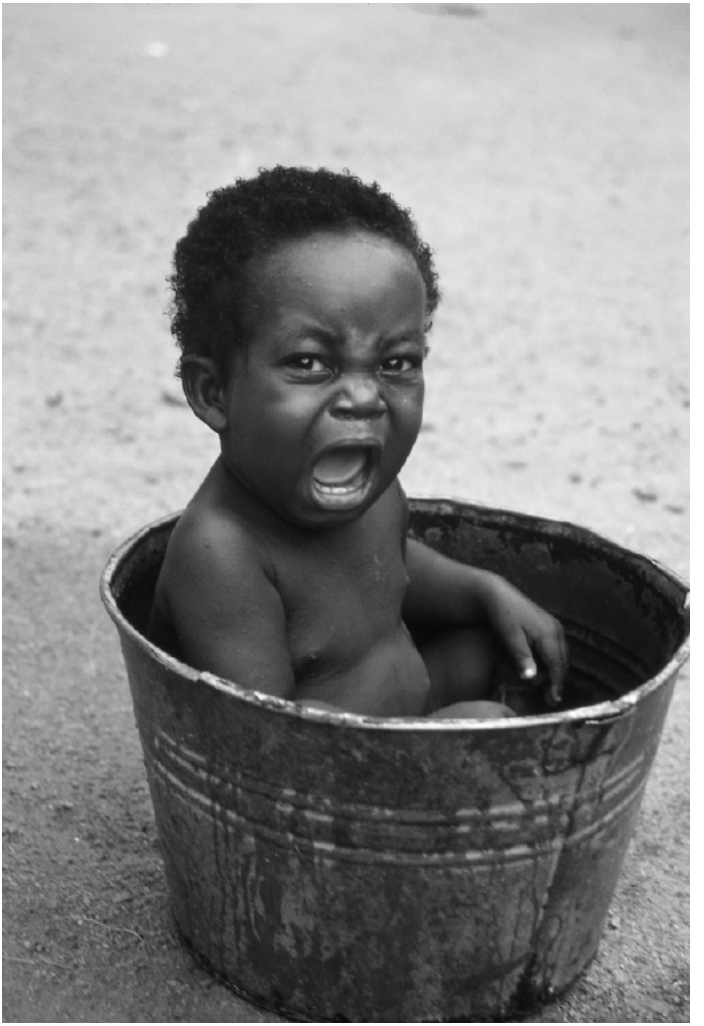
泣く

泣く子は育つというが、とにかく赤ん坊はよく泣く。赤ん坊はまだしゃべることができないから、泣くのはその代わりのコミュニケーションの手段だと故・松田道雄さんは『育児の百科』に書いている。

私は五〇をすぎて子どもを持ち、つまり普通よりずいぶん遅くに子育ての一端をになうようになったのだが、そのために、さあ大変、さあどうする、はてさて……の毎日であった。中でも「泣く」ことについては、私自身の無知を反省させられた。

赤ん坊に泣かれれば、なぜ泣いているのかと心配になる。母親のオッパイをあげても泣きやまない。おむつが濡れているのかと調べる。ちがう。おなかの調子が悪くて気持ちが悪いのか、ちがう。そんなときは、立たせて抱いて背中を軽くたたくとおなかのガスが出ると、母に教わったのを思い出してやってみるが、これもダメ。どこか痛いところでもあるのかと聞きたくとも、赤ん坊は何も言ってくれない、ただただ、泣くだけ。

抱いて泣きやまなければ、真夜中の家の中をおんぶして、よしよしと、歩き回る。「泣きむし、



人見知りするのも成長の証拠……

けむし、はさんで捨てろ」などと、子守唄というより、赤ん坊にはいやみのセリフを口ずさんでいると、夜明けとともにやっとスヤスヤ、やれやれひと安心と休む間もなく、今度は明らかに空腹を理由にまた泣き出す。

知恵がついてきて、四、五歳ともなれば、演技として泣くのも仕事のうちだ。まわりに人がたくさんいると大声で泣き、誰もいなくなると、止めてしまう。これは世界共通であって、望遠レンズごしにこの光景を見て何度も笑い出してしまった。人間の成長は泣き方にもはっきり表れる。

見ず知らずの人と分かると、子どもは泣く。だから、さとられずに、そっと撮影するのは、写真家の基本である。ガーナの農村を訪ねたとき、幼児がバケツで行水して遊んでいた。慎重に慎重にと、そっとシャッターを押そうとした瞬間、私に気づいたその子は大声で泣き出した。

でも、人見知りをするのは成長の知恵であり、泣き顔もまた美しい、と私はシャッターを押した。

歩く

一九六五年、アメリカがベトナムへのいわゆる北爆を開始した年だった。私は生まれて初めてニューヨークに行った。おのぼりさんよろしく、早朝にマンハッタンを歩いてみると、出勤する人たちの歩き方が日本とまるでちがうのにビックリした。

みな、顔を前につき出して、急げ急げと先へ進む。仕事場に向かってまっしぐら、足が長かろうが短かろうが、わき目もふらずにとにかく速い。なるほどこれがニューヨークかと、私はあっけにとられてながめるばかりだった。

それから一〇年もしないうちに、同じような光景が現れた。東京である。経済成長と機械文明は、人間の歩き方まで変えていくのかと、さみしいような、そしてその能力に感嘆するやら、複雑な気持ちだった。

人間は猿とルーツを同じくするが、まず樹上生活で立体的にモノを見て色を識別する能力や、手という道具を獲得し、続いて木から降りると、今度は直立二足歩行という体形を自分のものとして、手足の自在なパワーを生かして脳ミソまでふくらまし、地球上に広がった。

あとがき

私は写真を撮り始めて以来、人に興味を持ち撮り続けている。人間は感情を持つ。時には写される側の気分を損ね、お叱りを受けることがある。こんな気むずかしい人間なんて撮るのを止めるかと思うこともあるが、三〇分もたたぬうちに、気がつくとカメラを向けている。私は人間が大好きなのである。

この地球上には六四億人ともいわれる人間が住んでいる。人間はみな同じ、裸で初声を上げる。そして親の愛のもとで育ち、成長し、恋をして結婚をする。やがて自分たちの子を生み、育てる。親たちとの永遠の別れもやってくる。自分自身の老いをむかえる。

《人生はドラマ》だと私は思う。芝居や映画のような派手なドラマではないが、個々人が即興のドラマを演じ生涯を生きている。それは誰一人として同じドラマではない。私は地球上に生きる同時代の人びとのドラマを追い続け、すでに百カ国を超える旅を続けている。それは「人間とは……」を問い、探究を続ける旅でもあるのだ。

その出会いの中には、驚くほど豊かな生活をする産油国の家族がおり、一方ではわずかなお金

を得るために過酷な労働をする途上国の子どもたちもいる。暮色漂う都会の河畔で愛をささやく恋人たち、大家族生活をする農村で孫の面倒をみるおばあさんもいる。やがてはその孫たちに世話になり、野辺の送りをしてもらうことだろう。家族全員が「たすけ合う」ことにより家がなりたっている。そんなドラマとも出会っている。

国の違い、民族、風土、環境の違いは、驚くほど生活の形態を異にするが、人間の根底に流れる心――愛や欲望、喜び、悲しみは、みな同じではなかろうか。そして地球という太陽系の惑星の住人なのだ。

私は戦場を取材したことはないが、地球を旅していると戦争による悲劇を受けた人たちに出会う。前記「たたかう」で述べているが、プノンペンのトゥールスレンのポルポト時代の処刑地からは数えきれないほどの人骨が掘り出されていた。三〇〇万人近い人びとが犠牲になったという。草むらに積まれた九〇〇〇個の頭蓋骨を目前にして、悲しみから怒り心頭に発する思いでいっぱいであった。

アンゴラ内戦で地雷を踏み、脚を失った元兵士たち、アフガニスタンで出会った義足をつけ、歩行訓練を受け、これでまた羊をつれて遊牧ができると喜ぶ少年、すべてが人間の起こした戦争による被害者たちだ。二十世紀とは豊と貧、平和と戦争、理想と地獄という、相反する世界がともに、大きなうねりとなって地球を席捲した時代ではなかろうか。

だがしかし、人間はすばらしい。どれほど苦難にのしかかられようと、人は愛することに生きる。そして夢と希望を心のなかに保って生きている。

ある日、撮影した時の思い出や感動を雑談していたとき、丁度いあわせた「東京新聞」の文化部の塩野栄さんから連載の話をいただき、平成一〇年の正月から一年間書き綴ったものが今回のフォト&エセーである。タイトルは「人間万歳」であるが、万歳という言葉は「いつまでも生きること」「めでたいこと」を表わすが、その反対に「お手上げの状態、すなわち物事に失敗した状態」という意味でもある。勿論、私は人間がいつまでも栄えて欲しいと願い「人間万歳」とつけている。

私にとっては写真人生を続けてきた思い、そして考えたことを写真と文でまとめたもので、その感動をたくさん詰めたつもりである。

二〇一三年二月

田沼武能